

# 景観の時系列的な研究





# 「澁澤写真」の活用に向けての一試行

香月 洋一郎

## はじめに

本稿は「風景としての情報」（神奈川大学21世紀COEプログラム調査研究資料4『手段としての写真——「澁澤写真」の追跡調査を中心に——』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議 2006年刊）のいわば後編になる。前述の論文では、「澁澤写真」の中の岩倉市郎が1935年から1936年にかけてに写した喜界島（鹿児島県大島郡喜界町）の写真の資料としての性格とその利用への展望について、粗い素描を試してみた。以下の稿ではその利用法のひとつの模索を示してみたい。

前述した論文の後編的な性格を持つといっても、本稿でもって論考が完結性をもつといった意味あいではない。あくまで前稿を受けての一試論の続きであり補足になる。写真を資料世界のなかで、いわばわき役としてではなく、依って立つ主資料としてどのように使い得るのか、その方向に向けての一試行になる。

そのため以下の稿では、かなりの写真、図版がページを占めることになる。文字の流れの中に写真をあてはめていくのではなく、写真の写真正としての資料性をまず前面に出してみたいと考えたからである。

以下図版部分ではPlateとして1ページを割り、そこに

①澁澤写真およびそれに付されていた説明文（これは写真右横にゴチック活字で示したものになる。それに続くカッコ内の番号は日本常民文化研究所の整理番号）、つぎに、

②それにもとづくスケッチとそこに書きこまれた説明、そして

③として②に関する情報、と原則として三つの要素で資料を示してみた。そうしたページが本稿の大半を占める。②、③で示したデータは、私が任意にテーマを選び情報を記したもので、またテーマが異なれば同じ写真、スケッチに別の情報を示すことになる。

②、③で記した情報は喜界島阿伝の政井平進さんのお世話で、阿伝に生まれ、現在も阿伝におられる晶貴一真さん（1923年生）、長岡トシさん（1921年生）、長岡茂治さん（1926年生）からうかがった話と、阿伝に生まれ現在東京にお住まいの拵嘉一郎さん（1914年生）からうかがったものと、拵さんの著書『喜界島風土記』（平凡社 1990年刊）からの引用になる。前三方からの聞き書きは2006年10月、11月と2007年5月に阿伝の公民館で行った。

ここで300点を越す喜界島の写真から20点余を選びこの地の暮らしの一面を見ていきたいのだが、そのテーマは漠然とした表現ながら、まず「浜」という空間の性格と意味となろうか。

## たとえば浜の写真を見ていくことで

岩倉市郎の写した喜界島の写真の中に浜の砂糖小屋が写っている写真を散見する（本来であればここで明確な点数やパーセントの数字など記すべきであろうが、追跡調査が進行中であり、不明な被写体も多いため、大まかな表現であらわしておきたい）。それらは必ずしも砂糖小屋を主な被写体としたものばかりではない。背景の一つとしてたまたま砂糖小屋が写っているにすぎない写真もある。しかしある意味ではそれだけに、その写真の被写体の「周辺」に目配りをするだけで登場するありふれたものとい

# Plate 1 「この連中、朝海に行ったら晩まで帰らんが（笑）」



子供（於阿傳） 昭11.4 [3-42]



①この小学校の建物内部は板張り。はだしで中に入る。教室には2人がけの机。教室間の仕切りは障子。外まわりはガラス戸と板戸。

②喜界島は九州本島に向かうグラマン、B-29の通り道であり、軍の飛行場があったことから空襲で大きな被害を受けている。この小学校の海側の一角には軍の見張所があり、手旗信号とサイレンとで空襲警報やその解除などを嘉鈍の見張所に伝えあっていたという。阿伝の民家120戸のうち空襲で焼けなかったのは11戸。空襲の時はみな山の防空壕に避難して家々に焼夷弾が落ちるのを見ているしかなかったという。

⑦早町に呉服店があった。

⑧男の子は着物の下はフリチン。早町にあった尋常高等小学校に通うようになると、オニヒキサルマタという白と黒のパンツを買ってもらってはいていた。

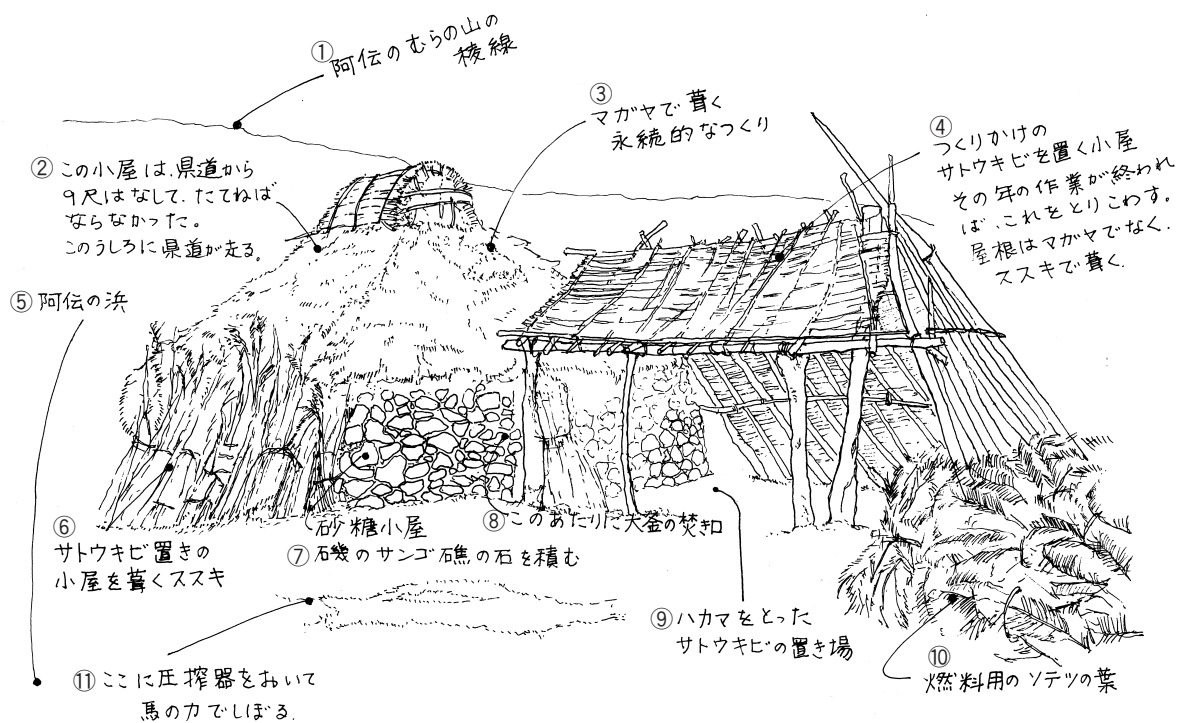
⑫これについてはPlate 22の②参照。自転車のリールを使うこともあった。

Plate 2

「こんな小屋は昭和40年代に入っても残っていましたよ。  
最後の一つがなくなったのは44年だったかなあ」



納屋 砂糖小屋？ [6-2]



①この稜線にはほとんど変化がない。阿伝の写真の場所を特定する際の大切な手がかりとなる。

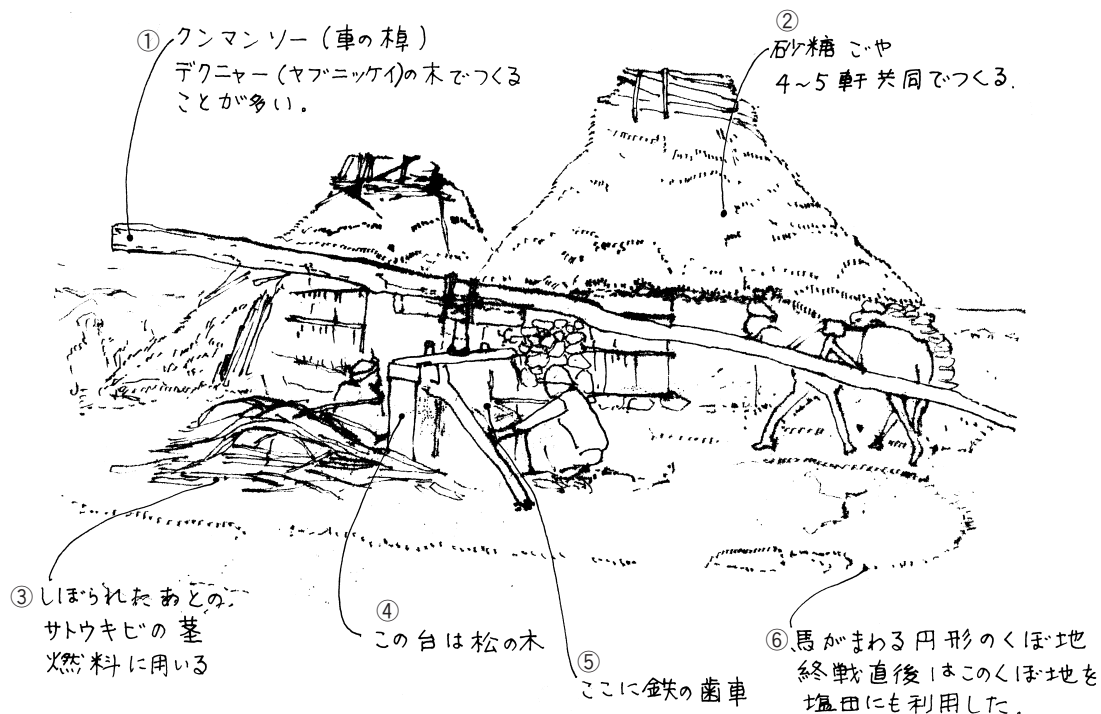
⑩燃料用のソテツの葉は砂糖小屋での作業が始まる前頃から刈り入れ、束ねて浜に積む。阿伝120戸の家々はほとんど山を持っていた。ソテツの葉は各々の山から刈ってくる。ソテツ山として山の一面にソテツを群生させていることも多かった。そのほかにも耕地のまわりにも植えており(Plate 7の②、同15の②)、そこから刈る。薪となる木々は少なかったため、日常生活では様々な植物が燃料に使われていた。ソテツの葉のほかには、圧搾したあとのサトウキビの茎、ススキ、イモヅルなど。



## Plate 3 サトウキビの圧搾風景



製糖場 喜界村坂峯 [8-9]



①デクニャー（ヤブニッケイ）は、山に多かったが、屋敷内にも植えていた。この木は戦時中口ウソク（ウソク）の材料として用いられたこともある。この①クンマンソーや④、⑤の部品は、砂糖をしぼる作業（11月から3月にかけて）が終わると家に持ち帰り保管した。

⑥ここでいう塩田とは、きわめて素朴な形の揚げ浜式塩田になる。この馬を引く場所は手ごろな広さの窪地のため利用されたが、わざわざ塩床をつくって塩をつくる人もいた。阿伝では末吉神社の前の浜あたりに多かったという。ただし、こうした塩田は終戦直後、物資が欠乏した時期のみのことになる。この方法は、おそらくかつてこの地方で行っていたやり方を、当時の古老が思い出して実施したのではないかとはいえない。

写真1 説明文には「製糖場 昭11.3 阿傳」とある。整理番号は [8-8]。Plate 2の写真と同じ小屋。Plate 2の写真と比べると燃料小屋の屋根も完成しており、馬が圧搾器を引いていて、サトウキビの山の中にハカマをとる作業の人と子供が見える。



写真2



写真3



写真4



写真2～4 砂糖小屋づくり。

2の写真にはそうした説明はなく、「材木運搬」と記されているが、浜へ馬でこの大きさの材木を運んでいる光景は砂糖小屋の材料運びだと思われる [3-2]。

3の説明は「家建 (2) ハミダスを両方に建て終った処」 [6-21]。2で運んでいる木材は、このハミダスと思われる。

4の説明は「家立 (4) 家建 (4) 棟の両側にムケーを差し終り隅木を掛けようとする処。棟上り垂直に下れる縄を棟取 [muni-tori] という」 [6-22]。

うことになる。それゆえに、この小屋の存在はむらの様々な生活の構造を探っていく入り口としての性格を持つことが見えてくるようでもある (Plate 2～6、8、10及び写真6)。

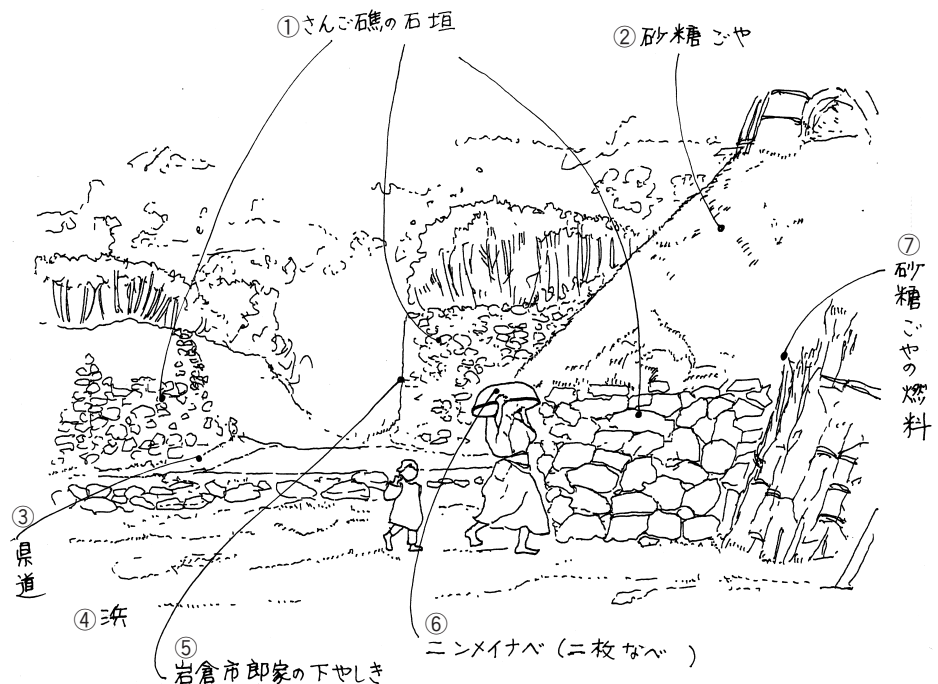
阿伝の集落の東に広がる浜は、むらの人々の共有空間であり、8月のアソビ (Plate 5、写真6) をは

じめとするむらの行事の多くがくりひろげられる場であった。浜と家々との間を一筋の県道が通っていた。それがおのずと浜と家々との境となっていた。砂糖小屋はその道から9尺以上離して造らねばならぬ旨、むらで定めていた。ここでいう砂糖小屋とは、サトウキビからしぼった汁を煮詰める場所である。

## Plate 4 ニンメイナベを砂糖小屋に運ぶ



鍋を運ぶ女 [5-11]



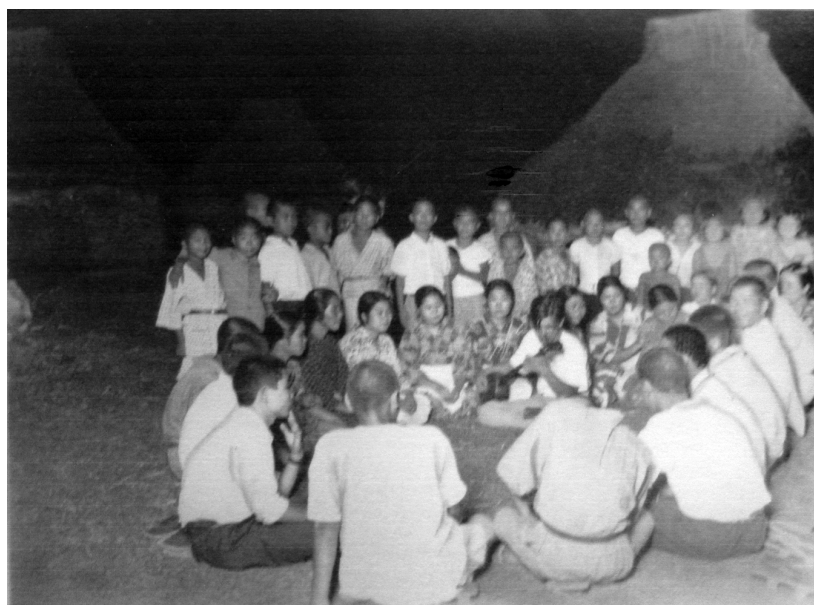
①これについてはPlate 13参照。

②これについてはPlate 2、3参照。

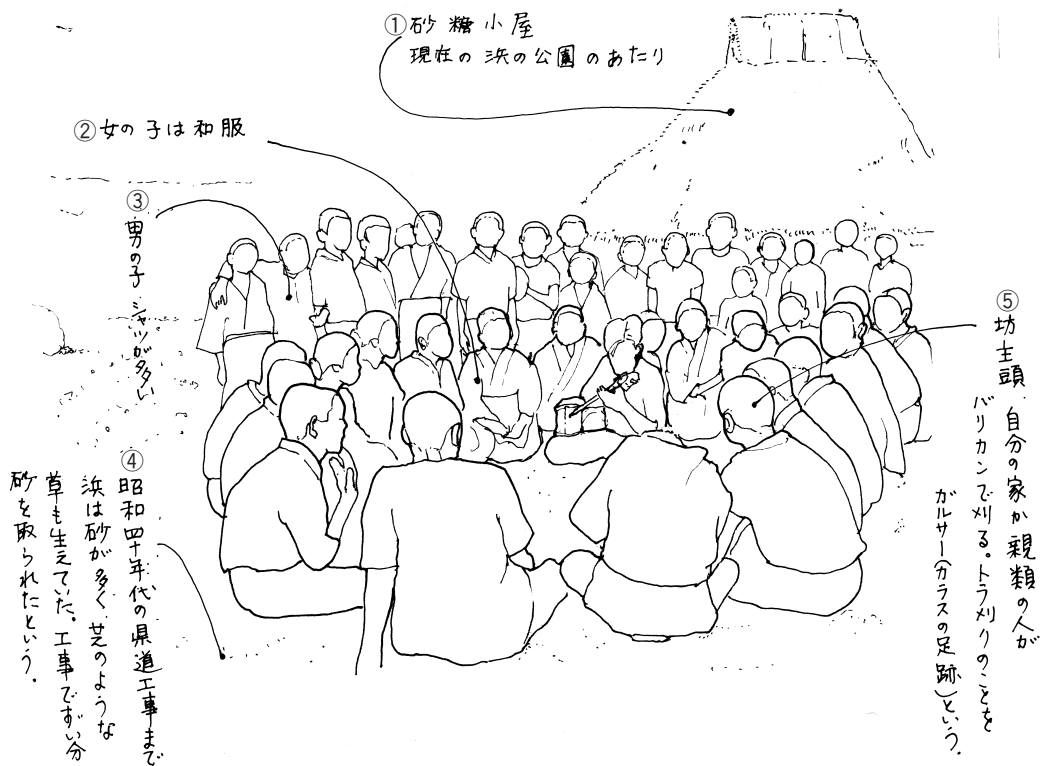
⑥ニンメイナベとは二枚鍋のことらしい。これは鍋の梱包の際の呼び名ではないかと言われているが、この数の表示がふえると鍋が小さくなる。阿伝の家々にはサンメーナベというもうひとまわり小さな鍋もあった。ただしその下はボードウーという小鍋だった。イチマイナベというのとはなかったらしい。この写真はニンメイナベを、砂糖小屋の砂糖のしぼり汁を煮て攪拌するための容器に用いるため運んでいるところ。家でカライモを大量に水煮する時もこれを使う。ヤギ、豚をつぶして煮る時にも使い、用途の広い鍋である。その修理には鋳掛屋さんが「ナビンカ、シューリ」とまわってきた。終戦後は墜落した飛行機の廃材のジュラルミンを使って鍋をつくっていた。なお、ニンメイナベで砂糖汁をたいたあと、鍋を洗った汁をそのままカメに入れておくと、1年ほどで酢になったという。自家用の酢はこれを使った。



Plate 5 夕涼み。夏の浜での遊び。砂糖小屋の前で

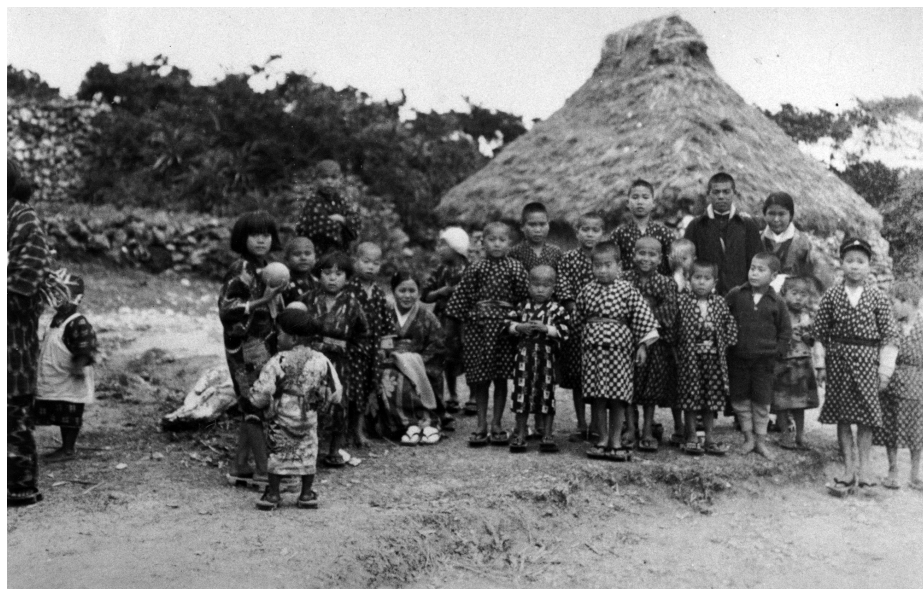


夕涼み（盆の十四日の夜） 於  
阿伝 昭11. 8. 30 [1-14-15]

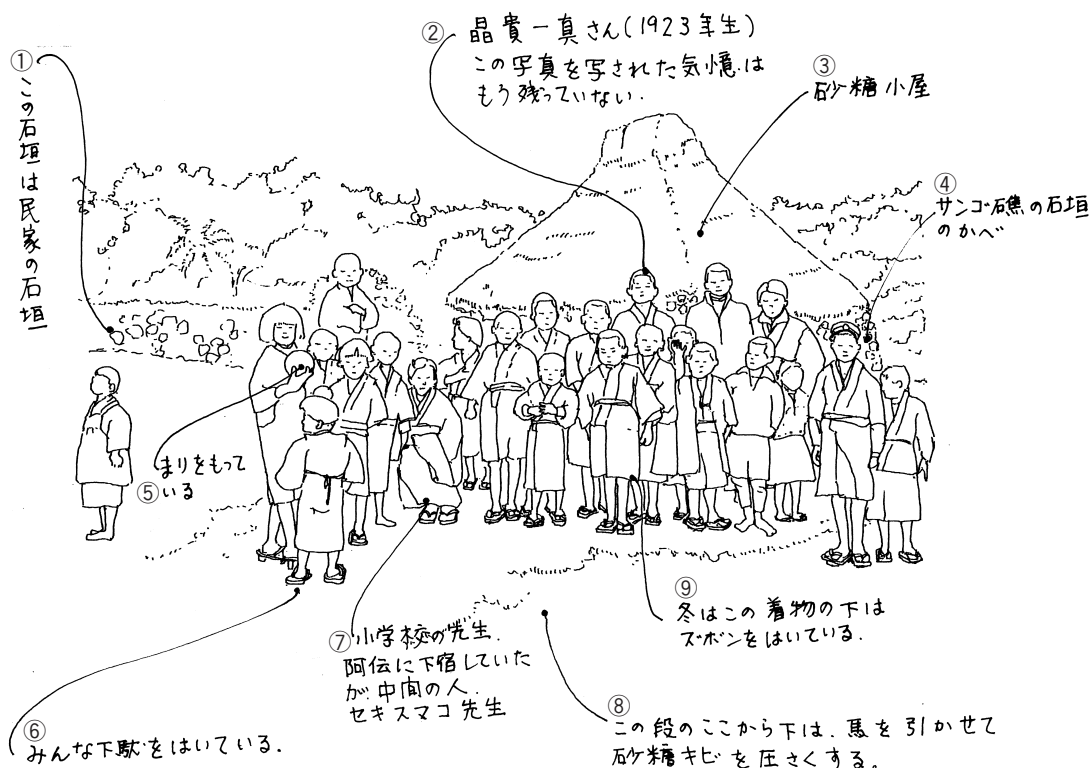


⑤ 1914年に阿伝にお生まれの拵嘉一郎さんによると、彼が小学校6年生の頃、大阪から転校生の兄弟2人が阿伝小学校に来た。彼等はおもとは花良治出身であり、家の都合で大阪に出てのちにもどってきたのだったが、この2人の兄弟（小5と小3だったという）が、霜ふりの学生服を着ていた。これが阿伝の小学校ではじめての洋服姿の子供の出現だったという。それ以降、男の子の間には少しずつシャツが普及したが、女の子はまだしばらく和服だった。とはいえ、小学校上級生になると和服といっても袴を着けていた。なおPlate 6で示すように、冬になると男の子も和服が多かった。

## Plate 6 正月、砂糖小屋の前で



正月の子供（花良治）  
[2-24]



⑥「現金収入の乏しい喜界島では、いつでも子供達の着物を購入できる経済状態ではなかった。しかし12月になると、毎年決まったように乏しい家計をやりくりして、子供たちの正月用晴着を購入し、12月中にこれを縫い上げておくのがせめてもの親心であり、また正月準備のひとつでもあった。この晴着同様に、子供たちの下駄と足袋の購入がある。（中略）この下駄は大事に履かれるが、珊瑚礁の島の石ころだらけの道は悪く、その消耗度も激しかった」（拵嘉一郎『喜界島風土記』より）。その晴着、下駄を着けての正月の写真である。



写真5 説明文は「藁干 於阿傳 昭11.8」[8-50]。これも浜の利用であるが、その向こうに見える家々の石垣と屋敷林がかつてのむらの趣を示している。屋敷の石垣の内側や上に根を張るガジュマルは現在より多く大きくうっそうとしていた。



写真6 Plate 5と同じ時のもの。Plate 5の写真が「遊び」の光景そのものとすれば、これはその記念撮影といった性格。説明文は「夕涼み」だが、写真を貼った台紙に付箋がつけられていて、それには「盆十四日の夜 蛇皮線をならしてうたをうたひたのしむ こうした夜 昔話もかたられる」とある [2-11]。



その横には馬の力でサトウキビを圧搾する場所と、煮詰めるのに使う燃料を置くための仮づくりの小屋があった (Plate 2、3)。

砂糖小屋は、むらうちの親類すじや親しい家々4、5軒で共同で造り、利用した。ここでの作業は11月から3月にかけて行われた。前述した仮設の燃料小屋はその間のみ造られているが、砂糖小屋は通年そこにある。ただ作業のない時期は圧搾器、それに取りつける長い棒、圧搾器につけられる鉄製の歯車などは家に持ち帰られ保管されていた。作業に使われない時期の砂糖小屋は、仲の良い子供たちが泊まりこんですぐすこともあれば、新婚の若夫婦がしばらく寝泊まりすることもあったという。

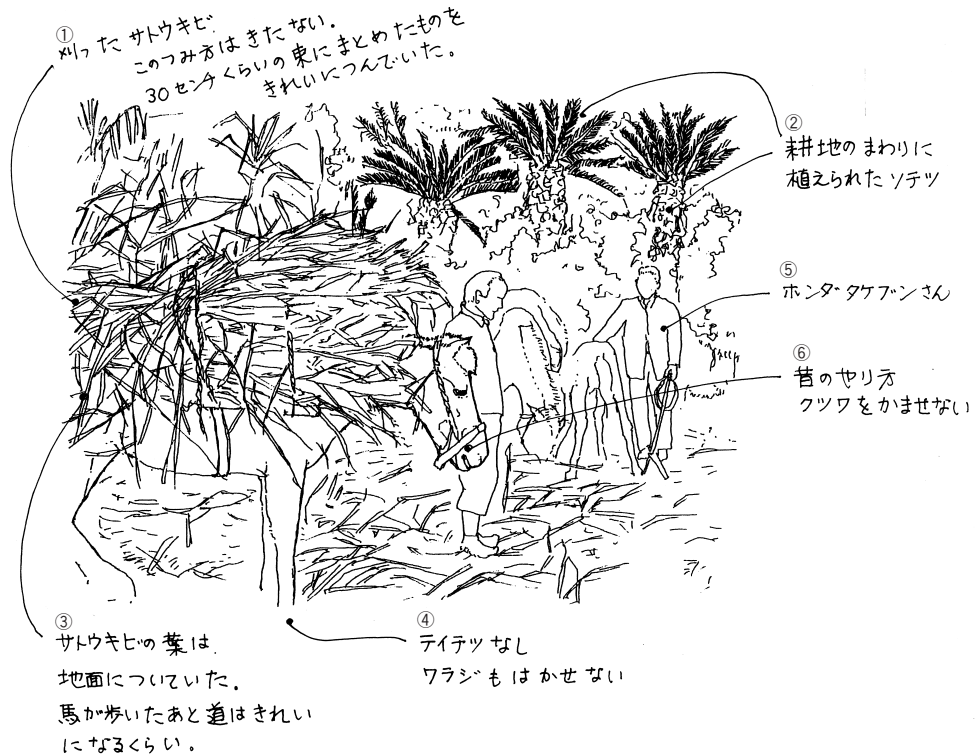
だから浜での様々な行事や作業を写した写真には、季節を問わずこの小屋がしばしば写っている。阿伝では、現在公園となっている一帯（そこに岩倉市郎の碑も建立されている）に多く分布していたという。昭和40年代前半まで、この小屋は残っていた。喜界島内にサトウキビの工場ができ、次第にそこに持ちこまれるようになってこの小屋は姿を消した。

砂糖小屋のある浜は喜界島の多くの人々にとって様々な記憶がそこに重なっている光景のひとつであろう。そのことがここでこうした写真を並べるだけで、文字でそう書き記すのとは違う形で伝わってくるように思う。そしてそこに写っている事象を切り

## Plate 7 畑から浜へサトウキビを運ぶ



甘蔗運搬 昭11.3 阿傳 [8-5]



①ほとんどの家が馬を飼っていた。馬の飼料となる草は、誰の山に入って刈ってもよかったという。畑からサトウキビを運び、砂糖の圧搾器の動力として働き、砂糖小屋の燃料運びにも使われ、堆肥づくりに欠かせず、馬が生産生活に占める比重は大きかった。

②耕地の周囲にはソテツを植えていた。燃料としても（Plate 2の⑩参照）、諸作業のシメ（Plate 13の③、15の④参照）としても用いた。

④石垣用の石を珊瑚礁の浜からとる時、浜に馬をつれていく。ワラジをはかせるのはその時くらいだったという。

⑥これについては2006年度の作業班の論文集「手段としての写真——『澁澤写真』の追跡調査を中心に——」の25ページ参照。



写真7 作業風景としてはPlate 7の続きになる。説明文は「甘蔗運搬 昭11. 3 阿伝」[8-7]。



写真8 写真7の続きというべきシーンだが、写真7と違って場所は阿伝でなく蒲生。説明文は「砂糖黍運搬（其の一） 於蒲生 昭11. 4」[3-25]。



口として追っていくと、様々な生活がその輪郭をあらわしてくる。

稲の脱穀は浜で行われていた。阿伝では稲を刈ると、干すことをせずに浜に運び、すぐに脱穀を行った(Plate 10)。同じ喜界島のむらでも、しばらく浜で積んで干し、その後脱穀するところもあった。また、麦の脱穀は、阿伝では多く1本の直線状の棒を用いていた。しかし2本の連結した棒で打つむらもあったという。こうしたむらごとの差も岩倉市郎は写真にとどめている。

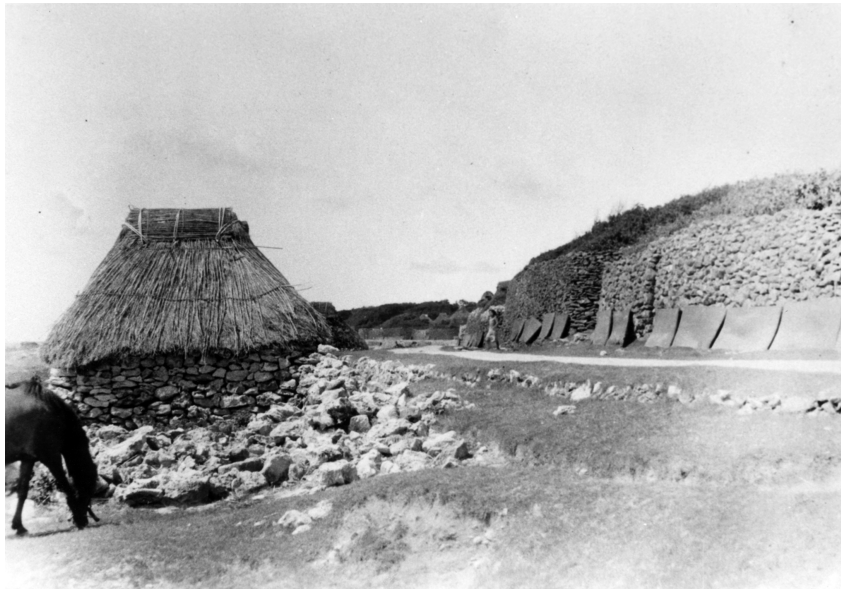
砂糖小屋の組立て風景も写されており(写真3、4)、馬力にかわる動力での圧搾器の様子も写真に残

っている(ここでは掲載せず)。

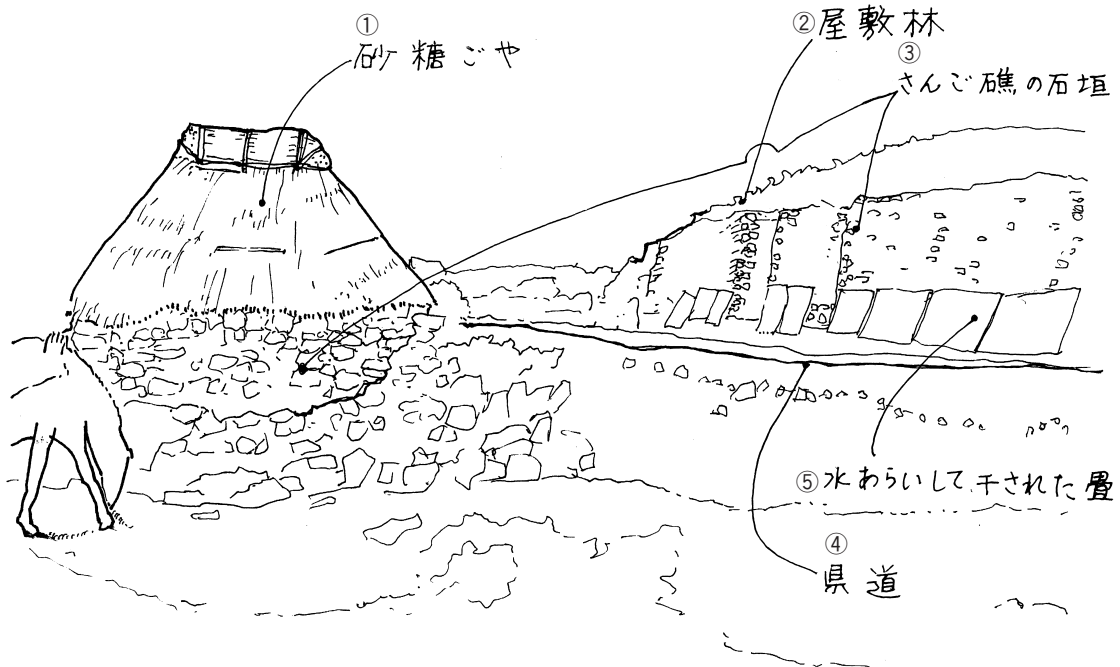
浜での暮らしといっても、漁についてのことになると、阿伝の場合、漁はほとんど磯からの釣りや、潮だまりの魚をとる形で行なわれ、板付船をこぎ出している漁はごく少数の人が行なっていたにすぎなかった。元来サンゴ礁の入江は、潮の干満にかかわらず利用できるようにするには開削をしなければ、三、四ヒロの小船であれ使いこなすのは手間がかかり、それになう小さな入江は阿伝の小学校の南にしかなかった。そしていずれの漁も稼ぎとしての漁ではなかった。

本土のむらの漁場を述べる時によく使われる「地

## Plate 8 砂糖小屋に面してタタミを干す



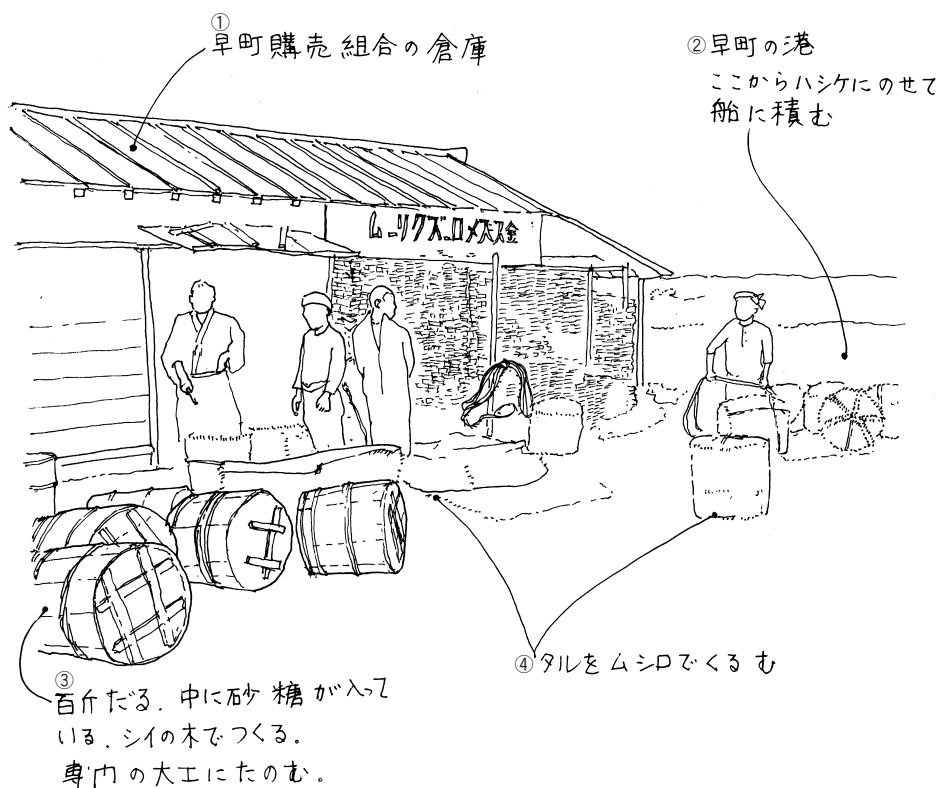
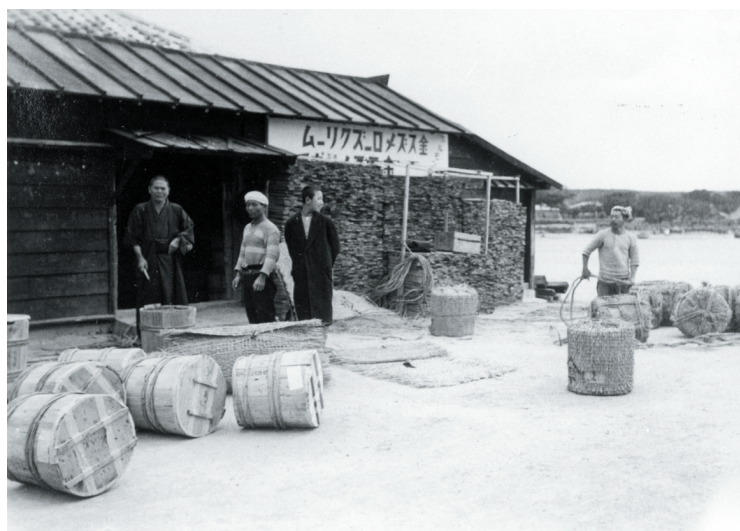
畳干（夏期大清潔） 於阿傳  
昭11. [5-36]



⑤梅雨があけた頃、「清潔検査」があった。これは家々が清潔にしているか、早町村役場の担当者  
と駐在所の警官が、区長の案内のもとむらごとに見まわるものである。これにそなえて家々はタタミ  
を洗い、干した。なぜかその頃、タタミには水をかけて洗い干していたという。当時、タタミは多く  
自分の家でつくっていた。むらの中に蘭草——丸蘭でなく角蘭だったという——を栽培している一角  
があり、そこから刈りとり、ユナ（オオハマボウ）を海でくさらせて繊維をとり、それを糸にしてタ  
タミを編んだ。なお、この写真が写された頃は食料増産が叫ばれた時期でもあり、堆肥を充分につく  
っているかを調べる「堆肥検査」などもあったという。

Plate 9 砂糖の出荷

砂糖樽荷造 昭11.3 早町港 [8-11]



①この建物はのちコンクリートの農協の倉庫となり、今もそれは荒れた状態で残っている。この向こうに見える海とさらに向こうの陸地の地形線もあって場所の特定は容易。

②口を南東に向けた湾。この湾には大阪、鹿児島からの定期船が着いた。阿伝のむらからこの出荷場所へは荷馬車（これで稼ぐ人がいた）を利用するか、馬につけてこのたるを運ぶ。馬の場合は百斤（一説には百二十斤）だる2つをつける。

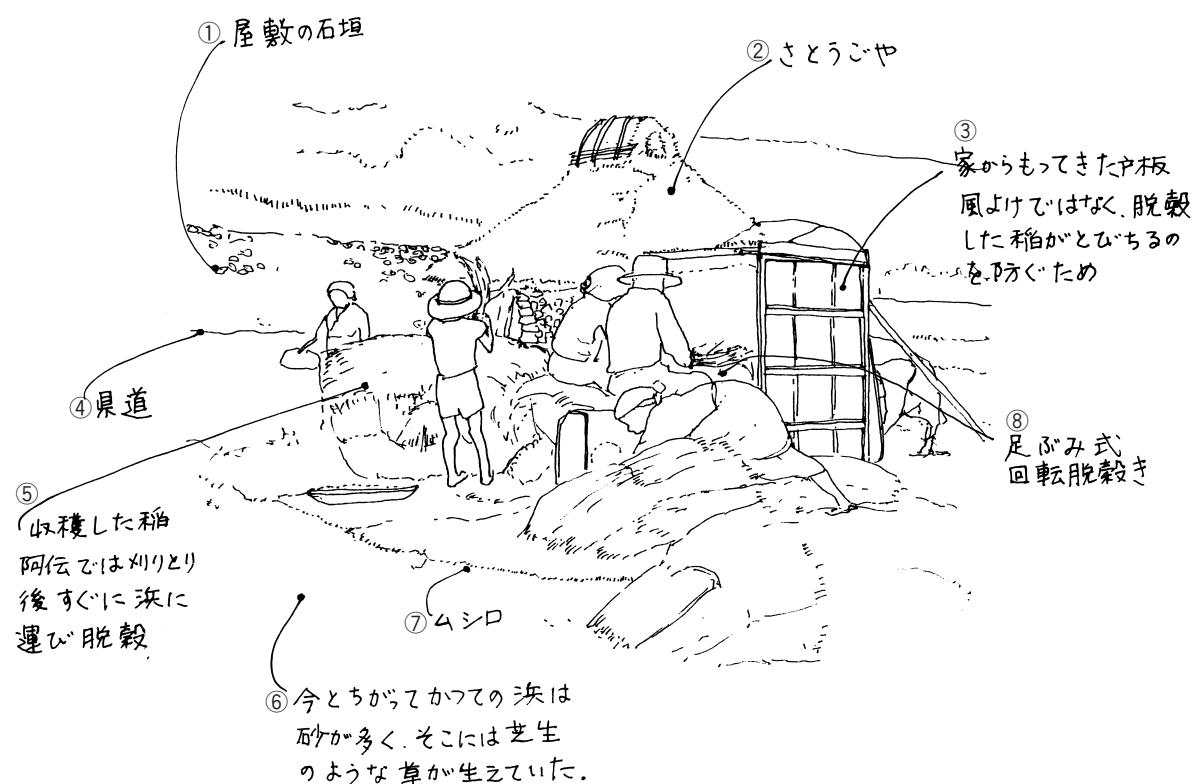
③百斤とは約60kgほどの重さ。煮詰めた砂糖の汁を攪拌したのち固まりかけた液をこのタルに流しこむ。多く収穫する家は「今年は何百斤とった」と言いあっていた。検査する者がいて、特級から3級までの等級にわけ出荷していた。



## Plate 10 浜の砂糖小屋の横で稲の脱穀



稲扱ひ 其ノ二 [8-48]  
 (なお、この一つ前に置かれている [8-47] の説明には、「稲扱ひ 其ノ一 雑穀機にて 於阿伝 昭11. 8. 3」とありこの写真と同時期、同場所と思われる。また「雑穀」ではなく「脱穀」であろう。—— 編者注)



⑥阿伝では、稲を刈った直後でなく脱穀したあとに浜に干す。「雨が降ったら大騒動よ。浜に走り出て大変よ」。

⑦このムシロは通常のおおきさのものではなく、脱穀の時の特用の大ムシロ。

⑧この時期、まだ千歯扱きを使っている家もあった。整理番号 [8-46] の写真（未掲載）には千歯扱きを用いての作業が写されている。もっともこの当時、阿伝でもっとも所有水田が多い家でも年収量はモミにして3石ほどであり、農作物の中での稲の比重は小さかった。

Plate 11 浜での麦打ち 荒木



麦打 荒木  
昭11.5.2  
[3-14]



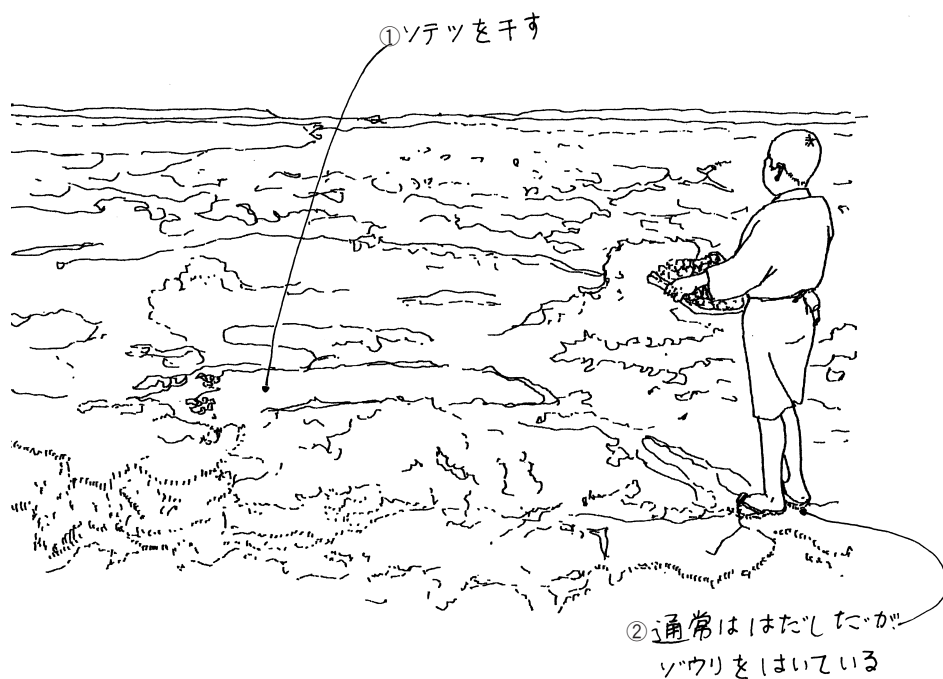
①農作業のやり方はむらごとにある程度差があったようで、Plate 10で示したように阿伝では刈稲は干さずすぐに脱穀し、そのあと干した。しかし、干した後に脱穀するむらもあった。この麦打ちの道具もむらごとに違いが見られたようである。阿伝のある古老からはこの呼称をムギウチボウと聞いたのだが、また別の古老は、マワリウツトウあるいはミグイウツトウという名を教えてくれた。まわり打棒、めぐり打棒の意であろう。この道具は、大豆やソラ豆をおとす折にも使う。

③喜界島でつくる麦は小麦が多かった。

## Plate 12 浜にソテツを干す



蘇鉄の實干し  
昭11.3 阿傳 [3-12]



①これはソテツの実を潰してさらしたあと乾燥している光景であろうが、このように浜で干すことは少なく、多くは家の庭に干していたという。喜界島の暮らしにおけるソテツの比重はきわめて大きい。ソテツというと救荒食物という非常時のイメージがあるのだが、長雨が続きサツマイモがくさった時など、食物をソテツに頼ることがあり貴重な植物だった。自分の家で様々に利用するほか、糸満の漁民との、魚との交換にも用いていた。漁民はこれで味噌をつくる。ソテツの味噌は阿伝の家々でもつくっていた。



写真9 これも浜でのひとこま。  
説明文は「海苔摘 昭11. 3  
池地」[3-21]。



写真10 これも浜の利用。説明文は「干大根 阿傳」[39]。本稿では示さなかったが、ほかに暮らしの場としての浜が写っているものとして [5-8]、[3-27] など数多い。なお [5-8] の説明文には「大根の葉を海岸に干せるもの」、[3-27] には「稲取入れの頃の浜 阿傳 昭11. 8. 4」との説明文がつけられている。



先は村付、沖は入会」という慣行はこの地域にはなく、周辺のむらの人が阿伝の海に来て漁をすることもしばしばあった。特に入漁料などは払わない。

阿伝のむらの背後には丘が続く。その丘の上に城ぐすくというむらがある。かつてむらの領域を定める時、城のむらびとが阿伝の方に歩き、海が見えるところまでを城のむらにしてよいといわれたという。その場所が阿伝と城との境になった。そんな伝承がある。そしてそのかわり阿伝はその台地の下に広がる平地を南北に広く確保したという。土地についてはそうした口碑があるのだが、地先の海については占有性

は薄かったようである。

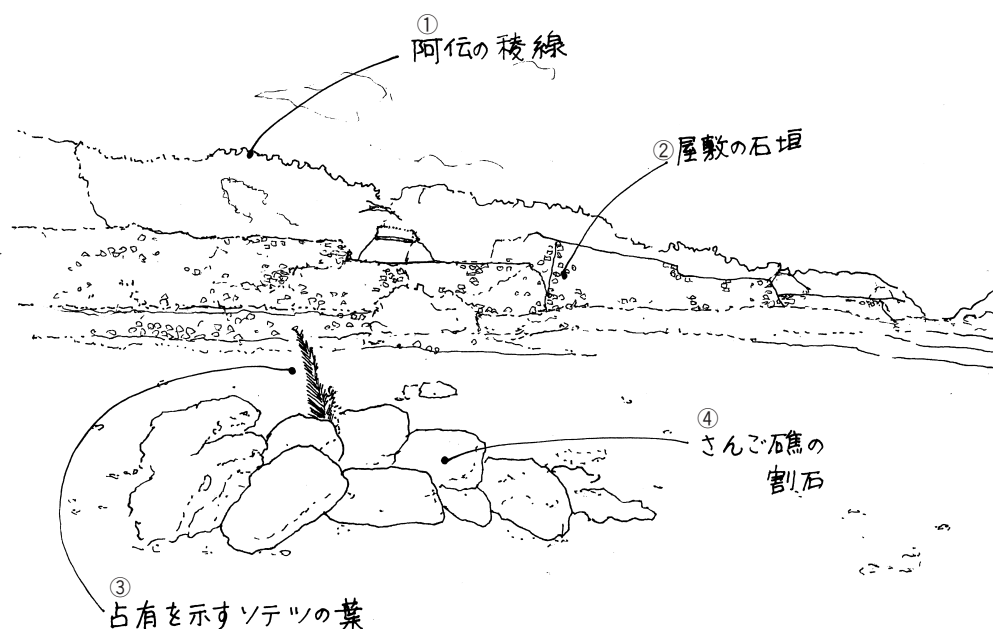
なお漁民について、写真にも頻繁に登場し、話にもよく出てくるのは沖縄の糸満からの漁民になる。早町の湾に50戸ほど住みついでおり、サバニで漁をし、島内に魚を売り歩いてきた (Plate 16～19)。

男の子たちが小学校の校庭で10余名写った写真 (Plate 1) を見て、阿伝のある古老は、「こいつら、朝海に行ったら夕方まで帰ってこんが」と話されていたが、その写った子供たちの中に少年だった頃の御自身も写っていた。これはもう70年前のことになる。

Plate 13 浜のソテツ葉のシメ (占有の標)



シミ (しめ草の一種)  
 (1) 拾った石にシミをしたもの (阿伝浜にて)  
 [5-22]

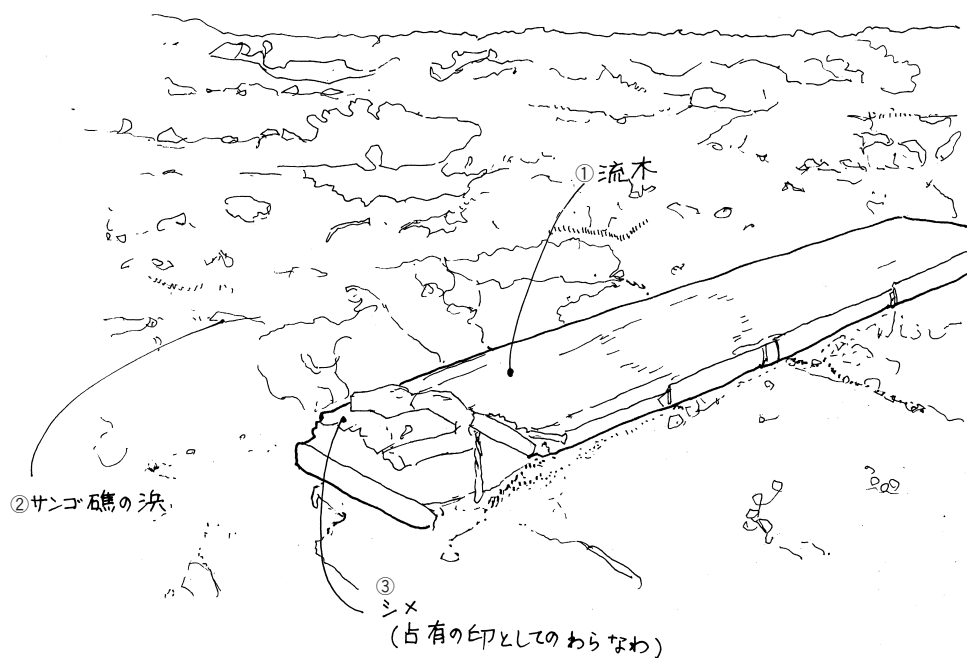


③浜のサンゴ礁の割石の占有の標としてのソテツの葉。こうした標をシメと呼ぶ。石は浜で割れた石を見つけたものか、割った後に間をおいて運ぶためにシメをしたものかは不明。②民家の石垣の石はすべてサンゴ礁の石であり、ふつうこうした石は割らないと得られない。石垣の補修などで石が必要な時、セイランボウという先のとがった鉄棒をサンゴ礁のすきまに入れ、はね上げて割石を得ていた。阿伝のむらびとであれば阿伝の浜の石は自由にとってよかった。割り欠いてとった石をあつめ、馬で家まで運んだ。石が大きいと太い縄をかけ棒を通して人力で運ぶ。人手によって「4人カタメ」「6人カタメ」と呼んだ。

Plate 14 浜に寄った流木のシメ (占有の標)



寄木のしめ (シメ) 左端を藁縄で結んである  
昭11.3 阿傳  
[1-14-36]



①大風や大波のあと、浜にはいろいろなものが打ち上げられており、こうした流木もそのひとつ。これを見た者が占有のための標をつけている。とはいえ実際には使えるものはそうなかったという。その浜に寄ったものあとかたづけは青年団の仕事だった。

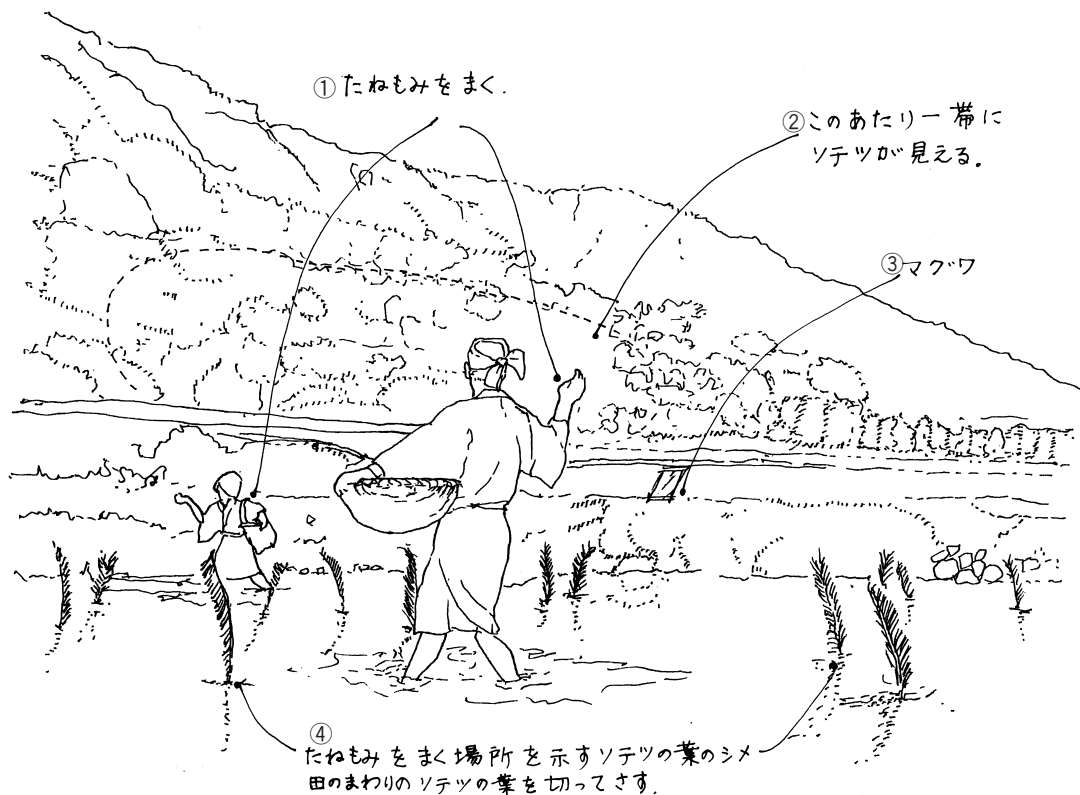
③2006年11月、私（香月）が阿伝の浜に行った折、流木が流れ着いており、ナイロンのロープでくくってのシメがあった。この慣行は今でも見られる。



Plate 15 もみ播きのソテツ葉のシメ（目印の標）



種下し 昭11.3.27 阿傳  
[8-25]



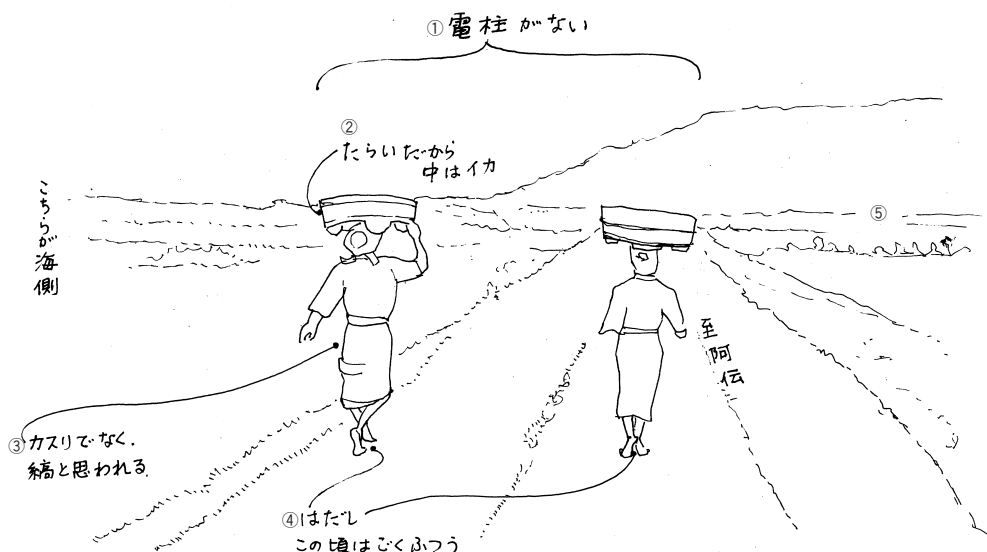
②ソテツの葉は様々に利用される。そのなかでもPlate 2-⑩で見たように、燃料としての用途の比重は大きい。家々は各々自分の持山にソテツを植えている一角を持っていたし、持山が少ない家は耕地の周囲に植えた。サトウキビを刈る頃になるとそれらのソテツの葉を刈る。大量に必要とするため人をやとったり、助けあって葉を刈っていた。

④ここのソテツ葉のシメは種もみを播く折の場所の目印である。シメとはなんらかの意味での意思表示であり、注意を喚起する標であり、その目的は様々である。

Plate 16 糸満の魚売り その1



糸満魚賣娘 昭11.3 嘉鈍にて  
[3-37]



至嘉鈍

①この写真のみでなく本稿で紹介する写真にはすべて電柱が写っていない。阿伝に電気がひかれたのは昭和33年だという。もっともひかれた当初は送電時間も限られており、夜はまだランプを使うことも多かった。また倹約家の家では送電時間が終わると、ランプの油代を惜しんですぐに寝た。そして朝は明るくなるとすぐに起きた。電気がひかれる前の生活サイクルが継続していたことになる。

②イカはスミを吐き、衣類が汚れるため、タライに入れて売り歩く。ふつうの魚であれば、容器は竹かごが多かった。

③これについてはPlate 19の②参照。

④魚売りだけでなく、島の多くの人々がはだしだった。このことは同時期のいく点かの写真からもうかがえる。

⑤この黒い点はソテツ。なお、現在この道の両側はサトウキビ畑が広がっている。

## Plate 17 糸満の魚売り その2



糸満魚賣 サワラは板の上にかメル 昭11. 8. 6 [5-31]



①この石垣は現在は変わっている。

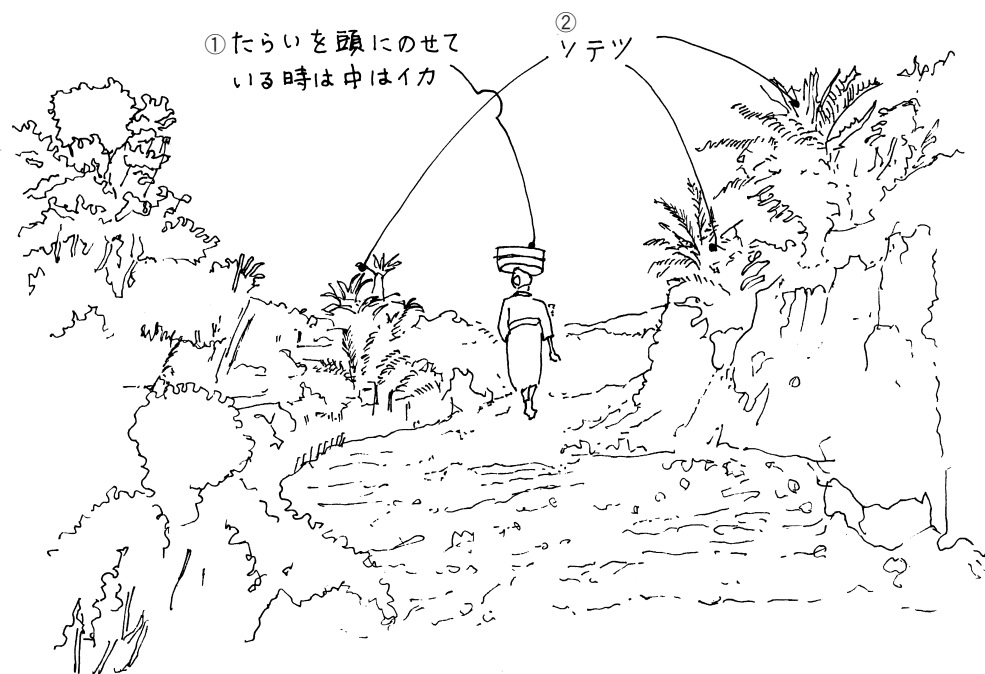
②Plate 16の①と同様。なおPlate 16の道を写真の奥の方にすすむとこの写真の場所に至る。

③Plate 16で示したように、タライなら中はイカであり、この写真のように板にのせむしろをかぶせていけばサワラだった。売る人は「サーラ、クンソーレ (サワラ買ってください)」「イカ、クンソーレ (イカ買ってください)」と言いながら売り歩いてきた。サワラを売るのは夏。サワラの前の梅雨頃はトビウオをよく売っていた。トビウオ、ワタブター (小型のトビウオ)、イカ、ウルミ、ヒュー (シイラ)、マツヌユ (ハマダイ) などほとんど年間を通じて漁獲があり、島の魚の需要はほとんど糸満漁民によって支えられていた。

Plate 18 糸満の魚売り その3



糸満魚賣  
昭11.3.19  
志戸桶  
[01-14-38]



①この時使われていたカメラの最も早いシャッタースピードは25分の1秒だったらしい。Plate 16、17のように魚売りの写真はブレているものが多い。彼等と一緒に動きつつ、その歩き売りの姿をそのまま写そうとしたからであろう。これは若干遠景ということでブレが少ない。喜界島の人たちは彼等から魚を買う時、現金の場合もあり、野菜と交換の場合もあった。祝いなどで大きな魚がいる時は、前もって頼んでおいた。



Plate 19 糸満の魚売り その4 松葉とり



糸万娘 松葉拾ひに行く処  
(於早町平家森) 昭11. 4. 26  
[3-44]



①平家盛（あるいは平家森）とは喜界島の北東部にある丘。

②対照例はPlate 1、6参照。

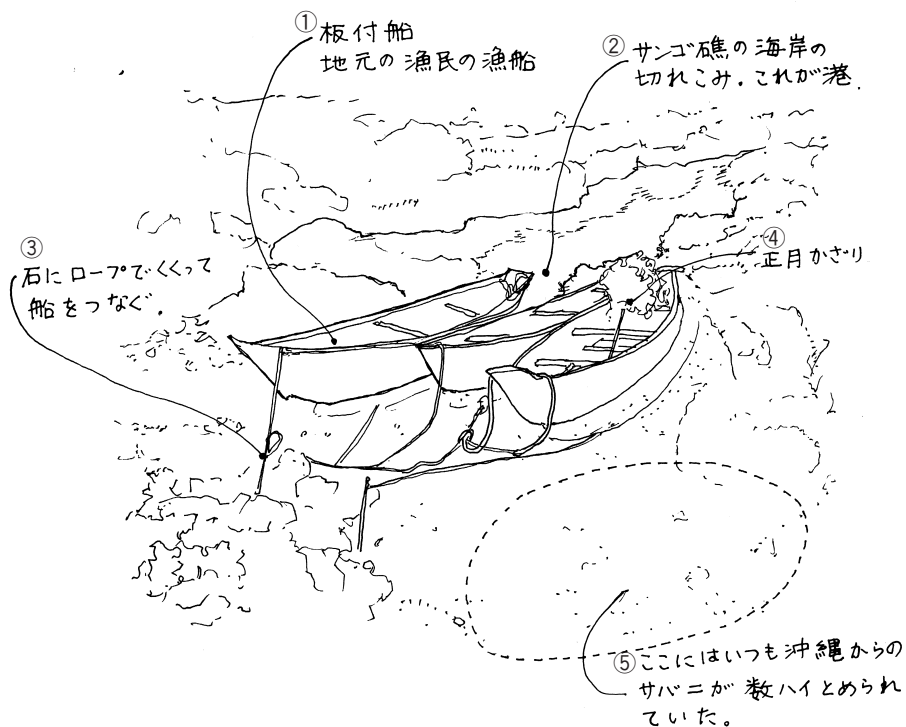
④糸満の人たちは早町の入江の一角に集まって住んでいたが、喜界島に山を持たなかった。そのため燃料に使う松葉を山にとりに行った。松葉はことにイカに火を通す時に適した燃料だったという。糸満の人たちと喜界島の人たちとの交流は単に魚の売買のみでなく、多様なつながりがあった。たとえば糸満の人たちは喜界の農家が殺した豚の血を、網染めのためにわけてもらっていたという。



Plate 20 糸満の漁民。サバニがおかれていた浜



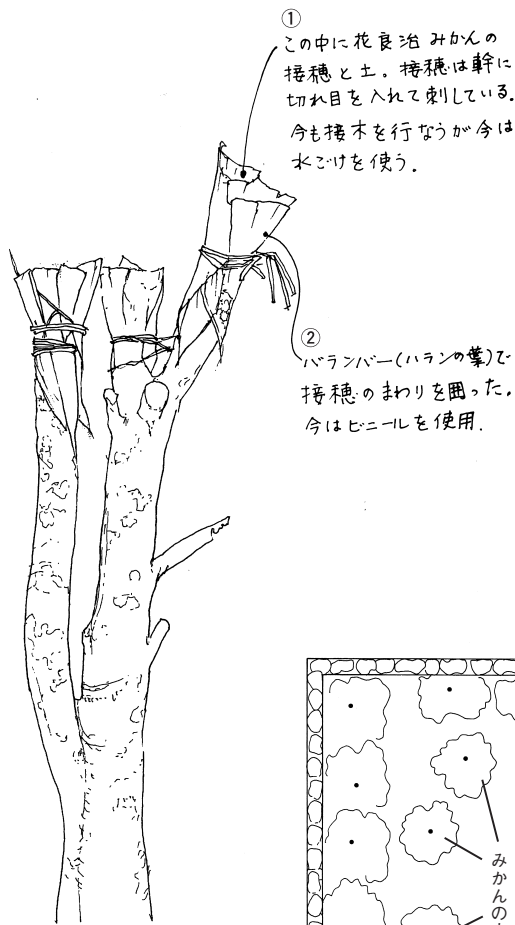
板付舟に松を立てたもの 喜界村坂嶺  
昭11.1 [01-14-20]



①板付船（イタスキー）はもとは奄美大島でつくられており、喜界島では明治中期頃まで大島から購入していたが、のち喜界でもつくられるようになった。2丁の櫓と1丁の櫓を使ってあやつったというが、さほど速度は出なかったらしい。サワラの突きん棒漁やタテアミ漁を行っていた。

④これは船の正月飾りであるこの部分を写した写真だが、写真の追跡調査の折、この写真の場所（坂嶺）のすぐそばにお住まいの方が、⑤の場所にかつては糸満のサバニ（クリ船）がいつもつながれていた。それが写っていないのは不自然だと指摘された。サバニが正月で郷里に帰っていたのか、漁に出ていたのかは不明だが、いつもあったものがない不自然さをまず指摘されたことが印象に残っている。

# Plate 21 みかんの接木



花良治蜜柑の接木 昭11.3  
阿傳 [3-33]

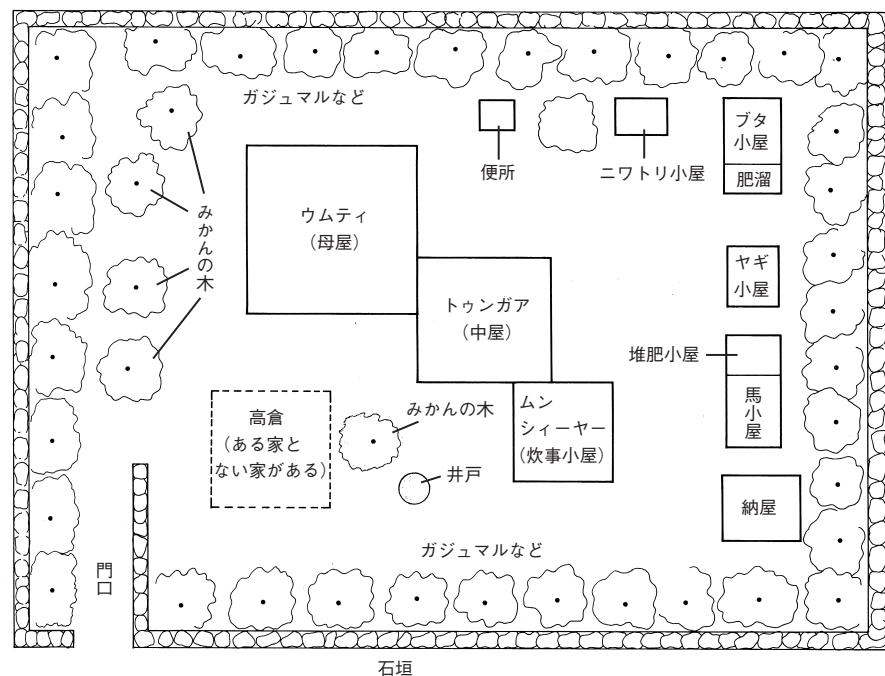


図 当時の阿伝における平均的農家の家屋の配置 (原図・拵嘉一郎)

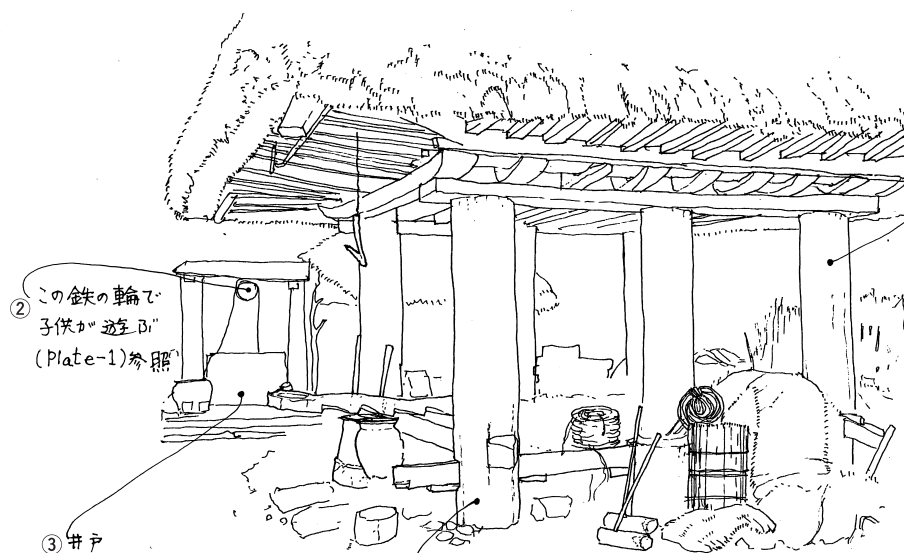
①かつて島のみかんは、在来のシマミカンと花良治ミカンとクネンボがあった。在来のシマミカンはタネが多かった。繁殖力も強く食べたあとタネを庭に吐いておくと、そのまま芽を出すこともあった。花良治ミカンは香りが良くタネが少なかったため、シマミカンを台木として接木で増やした。クネンボは正月の飾りに使うみかんだが、これはすっぱかった。なお、現在島内で売られているみかんはタンカンが多く、これは新しく広まったもの。かつて屋敷のまわりはサンゴ礁の石垣がめぐらされ、その石垣の上に、あるいはすぐその内側にガジュマルが根を張り、さらにその内側にはみかんの木が植えられていた。下図は『喜界島風土記』に示されているかつての阿伝の平均的農家の屋敷の図をトレースしたものである。

Plate 22 高倉



高倉 六ツ股 mutsumata (六本柱)  
阿傳 福元常有氏宅 [6-18]

① 高倉は柱が6本のもつと4本のもつがあった。  
ふつうの家は4本、6本倉をもつ家は貧乏家。



② この鉄の輪で子供が遊ぶ。  
(Plate-1)参照

③ 井戸  
阿傳は水にぬぐまれていて、ほとんどの家にあった。

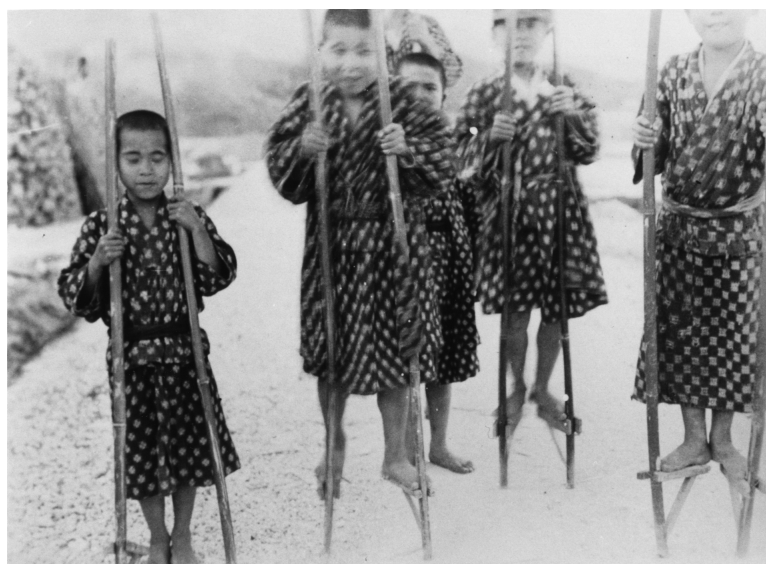
④ 白い花が咲くイシユという木。奄美大島にある。  
直径60センチほど。ネズミよけのためカンナで表面をきれいに削りみかく。

① Plate 21の農家の屋敷配置図で示したように、屋敷内には納屋、ウマ小屋、ブタ小屋、ニワトリ小屋、ヤギ小屋など付属舎が多かった。高倉もその一つで穀物や砂糖、また諸道具を保管しておく機能を持っていた。Plate 3の④や⑤で示した砂糖をしぼる歯車やその枠なども、ここにしまっておいた。

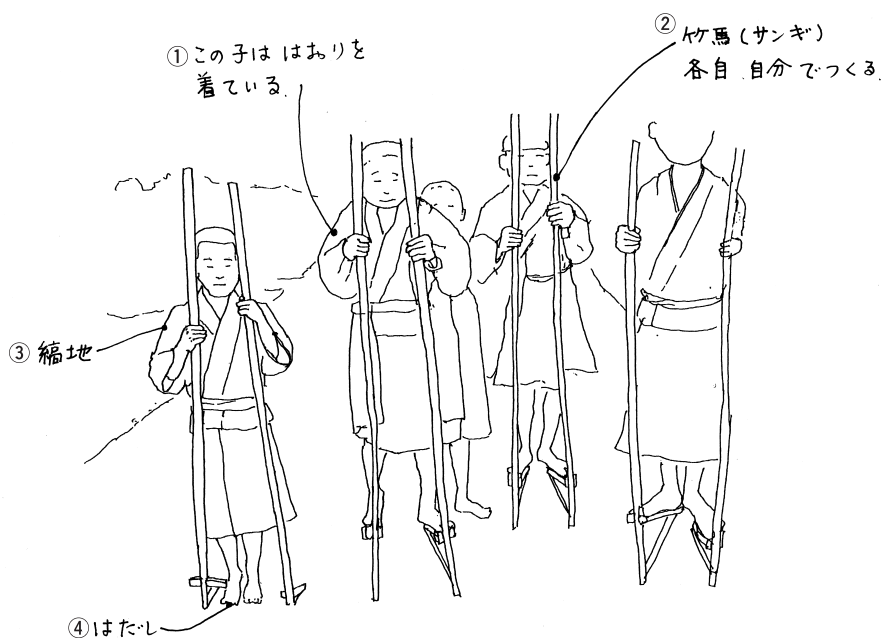
② ハークルマーという。

③ 水が涸れる時期をみて、井戸がえを行っていた。

## Plate 23 竹馬にのる男の子



竹馬に乗る子供（竹馬の事をサンギといふ）（於阿傳） 昭11.4 [3-43]



①春から秋はPlate 5で示したような服装になるが、冬になると和服の下にズボンを着けたり上に羽織を着たりした。

②竹は子供の遊具として様々に利用された。竹トンボ、水鉄砲、小鳥の籠、釣り竿など。

④はだしは当時はあたりまえの時代だった（Plate 16、17、19、24の写真c、d）。子供たちはよく足の生づめをはがした。尋常高等小学校になると、阿伝から早町まではだしで歩いて通ったが、その途中で生づめをはがすことも多かったし、またサッカーのようなボールけりの遊びの折も、足のつめを痛めた。これはシャリンバイという木を丸く削ってつくった固いボールを使っていたため、つめをひどく痛めることがあった。ある古老によれば「小便かけて放っとくだけです。自然になおりました」。



Plate 24 写真によく登場するシナイという竹かご



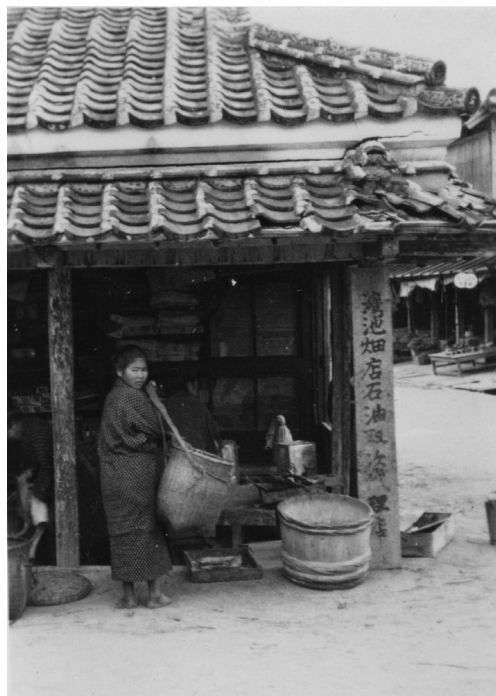
写真a



写真c



写真b



⑤上の写真は3月3日のサンガンニチという行事で、ウムムッチーというもちをつく光景だが、ここではそこに写っているシナイという竹かごに焦点をあてた形で写真を整理してPlateを構成してみた。aの説明文は「荒籠 (aradira) 造り 於蒲生村 昭11. 4」[3-39]。中央にシナイが写っている。bは「買物 (湾) にて」[5-9]。cは「店」[5-18]。いずれもこのかごが写っている。ほかに「諸掘り」と記された [3-36] (本稿には掲載せず) をはじめ、このかごはこの喜界島の写真群に散見する。

その方はこの写真を見て「この写真を写した時のことは覚えています。岩倉さんがカメラ持って歩きよったら子供たちが寄ってくる。それをよく写してくれよったんです」。続けてこう話された。「私が小学校3年生の時、岩倉さんが小学校に来て昔話をしてくれた。その頃島にオールバックの髪の人やらあまりおらん。白晳でロイドメガネかけておとなしい人でした。その人が『昔話をするから聞きなさい』と言って『猿の尻はなんで赤くなったか』という話をしてくれた。なんで赤くなったかは忘れてしまうけど（笑）」。

「朝行ったら夕方まで帰らない」という浜は、また別の古老によると、「今ふりかえったら私たちが子供の頃のまさに揺籃の場所でした」ということになる。遊びにおいても、家の仕事の手伝いにおいても、むらの諸行事においても、子供たちはこの浜で多くの体験を刻まれ、いろいろなことをおぼえて成長していったはずである。岩倉市郎の写した浜が写っている数十葉の写真を見るだけで、そのことは容易に理解できる。

## シャッフルする写真

そして前述した2006年度の班の報告書で示したシミュレーションでひろった諸概念にもとづいて、各々に被写体のその向こうの世界を探っていくことは、この写真群を使って行い得る作業のひとつのように思える。

Plate 24は、3月3日の行事のひとつまでであるが、たとえばここで使われている竹カゴひとつを軸として写真を集成すれば、ここで示したような整理票に

なろうし、3月3日の行事をテーマにすれば、また別のデータの載った整理票にもなり得よう。たとえばそうしたシャッフルをくりかえしていくことで、この写真資料から情報を引き出す可能性はいまひとつ前進すると思う。

現在日本常民文化研究所にある喜界島の写真が、岩倉市郎が写したすべての喜界島の写真ではないのかもしれないのだが、しかしこれを見る限りにおいても、生活文化を探る上でのポイントはさまざまに指摘できると思う。

まず確実な傾向として言える事は、岩倉の住んでいた阿伝のむらの写真の比重が高いこと。前述したようにすべての写真の場所の特定がまだ終わっていないため、ここでその比率を数であらわすことは避けておくが、阿伝については、1月、3月、6月、8月の行事のありさま、むらの道普請のようす、春から秋にかけての農作業、冬場の砂糖小屋の様子、葬儀や墓地、一周忌のありかた、馬の働く姿、殺されるブタやヤギなどの家畜と暮らし（ニワトリのみは写されていない）、むらの景観など、その目くばりはきわめてきめこまやかである。

また運ばれてゆく諸物資、往き来する様々な人、いわゆる交通交易面の事象をできるだけフィルムに写し記録していこうとしていた岩倉の姿勢も強く伝わってくる。

この写真の追跡調査の作業にはそうした分析もともなわなければならないだろうが、本稿はそのほんのとはば口に立っての瞥見の覚え書きとしてひとまず筆をおきたい。

(かつき・よういちろう)